月　刊

Mélange

Vol.136

2018.10.28

詩と評論

月刊「Mélange」
Vol.136 2018.10.28
「月刊めらんじゅ」編集部

「月刊めらんじゅ」136号　目次

詩・俳句

欧州旅詠／灼熱に厳寒詠……岩脇リーベル豊美　03
会社社会／未来広告／吃水の窓 ……高木敏克　04
石段を降りる／白鳥……にしもとめぐみ　05
一番星……黒田ナオ　06
クラブ・アップル……月村香　07
のままの／そばだて ……大橋愛由等　08
樹のかたち／夜明け ……高谷和幸　09
カンブリア紀生物群／おばちゃん ……野口裕　12
鐘の鳴る場所で ……冨岡和秀　13
呼び声 ……北岡武司　14
ことり　とり……中堂けいこ　15
夢の前の川へ、夢の野へ ……大西隆志　16
ケーキ／牛乳 ……中嶋康雄　17

第21回ロルカ詩祭　朗読作品集

あにみたす……安西佐有理　18
多雲にて……大橋愛由等　19

連載／エッセイ

十九歳の残り雪－《Die Welt ist alles, was der Fall ist.》Ludwig Wittgenstein……冨岡和秀　10
神戸詞（うた）あしび125「台湾—近接する異郷　日本との交雑が現実」……大橋愛由等　20

編集部だより★56／2018年の夏は台風など自然災害に翻弄された季節となった。まとまった読書はできなかったものの、ひさしぶりの海外旅行を果たし、阪神・淡路大震災からの歳月がひたすら国内に向いていたことを思い知った。／奄美のことも書いておこう。今年は明治維新からちょうど150年にあたる年なので、FMわぃわぃの連続企画として、「奄美にとって明治150年を問う」シリーズを7月から始めた。6人の専門家にこの150年間を俯瞰してもらおうという内容である。奄美は、薩摩藩が実効支配する江戸時代を経て、明治になってなし崩し的に鹿児島県に所属することになる。1609年に島津が琉球王国に軍事侵略して以来、外交上は「琉球國之内」という体裁を中国（清）に取りながら、奄美を支配した。それでは奄美の側からするといつから明治=近代が始まったのかという疑問が生じる。薩摩藩の支配地であっても明治維新の激動に巻き込まれることは殆どなく、薩摩藩の財政を支えた砂糖を算出していた場所として近代への序章を準備していたとも言える。となると、第二次惣買入制が始まった1830年（天保元）ごろからがプレ近代と言い得るのかもしれない。（第二次惣買入制は1872年（明治5）まで続いている）★第136回「Mélange」読書会は詩人の中堂けいこさんの〈「記号論」……その入り口に立ってみる〉をテーマに設定していたが、例会当日台風の接近により交通機関が止まってしまったのでやむなく延期となりました（せっかく中堂さんも夏をかけて文献を読んでくれていたので、いつもは休会となる12月〈9日〉）に「Mélange」例会を開催いたします。そして10月例会は、中嶋康雄氏が担当。「詩のことば、広告のコトバ、法律の言葉」ーテーマにして語ってもらいます。〈カバー写真は姫路・書写山で撮影したもの。撮影・大橋〉（大橋愛由等記）

◆欧州旅詠

岩脇リーベル豊美

山の水と大河の光が出逢うの秘境駅
児の大泣きも気に入り向日葵列車で読んでいる
ターバン男の横入り睨んでやるエスカレータ
トルコ人完熟棗売る旧飲料水貯蔵庫スーパー
水飛沫帆立貝や海神の裏側で飛び散る
透明な耳やひとの猫語を聞いている
ずっと独り言かセリフ掻き消す風の車
報復テロ雪結晶まねて毛布編む
耳奥で聞こえる鳩語蝙蝠語の翻訳
銀魚という名をもつ蠢く虫の足
生きとるけど鉄柵に流されて生きる
台風上陸の瞬間思い出すサイレンで
リルケという名の蒼紫陽花や可憐
嗅覚の月下美人が揺さぶり起こす
蚊の羽音を闇の中で見るの
夜の蠅見えているのか海なのか
水没の十二宮めぐる木星の旅
故郷では犯罪者吊るせ殺せの大合唱
冷蔵庫自販機ひっかかる河原の電線
危険情報の水中にもう一つの町

◆灼熱に厳寒詠

岩脇リーベル豊美

月明かりに風車の廻る奈落かな	Die Windmühle läuft im Mondschein herum vor dem Abgrund	The windmill turns around in the moonlight in front of the abyss
なか海を溺れる人魚の鱗剝ぐ	Ich reiße die Schuppen einer Meerjungfrau ab die im mittleren Meer ertrank	I tear off the scales of a mermaid drowned in the middle sea
氷魚は海底で溺れたことだけ覚えている	Der Eisfisch erinnert sich nur daran, dass er auf dem Meeresgrund ertrank	The icefish remembers only that he was drowned on the bottom of the sea
磔刑に共謀者手向ける雪遊び	Der Verschwörer gibt Schneespiel hin für einen Gekreuzigten	The conspirator gives snow game for a crucified one
幻想の寒気に苦笑い過ぐ死刑執行人	Fantastische Kälte – der Henker und ich gehen bitter lächelnd vorüber	Fantastic cold – the hangman and me pass by with a bitter smile
狂い咲きアーモンド花に地吹雪会釈	Unzeitgemäße Mandelblüten und aufgewirbelter Schnee tauschen Verbeugung aus	Untimely almond blossoms and whirled snow exchange a greeting each other

◆会社社会

高木敏克

会社は社会を裏返してできる不自然な小社会であり
自然な社会とは矛盾している
その矛盾を解消するとか会社はたちまち消滅する
　かもしれない
そのため、会社は自然との境界を固いコンクリートで作り上げて
列島の海岸線に甲殻類として住み着いている
貝などの軟体動物や自由遊泳性のノープリウス幼
　生として
孵化して以来のフジツボ同様に
会社は自然との矛盾を固いコンクリートの殻で作
　り上げ
列島の海岸線にへばりつき
水源をさかのぼって内陸部までその性域を広げて
　しまっている
いまや、その不自然だった殻も自然の一部ではあ
　るが
矛盾が消えたわけではない
内部の骨だけ残す人類が外部に骨のある会社から
コンクリートの都市を作り上げたのは美しい光景
　でもあるが
天上から見れば
闇の中に輝く都市がその会社の分だけ光を消すの
　が見える
眠りといえば眠りだが
気が付けば私は会社の中に眠っている
海辺の終末介護マンションもまた一つの会社なの
　だ
と気が付いて
私はあわててもう一度寝た

◆未来広告

高木敏克

未来は存在しない広告に過ぎない
あるのは現在だけだ
と、まちがった実存主義で自殺した友人が
一人いた
六甲山中で交尾するのだと
彼女とでかけていたのに
一人でいくと
松の木の枝に首をくくっていた
僕が死んでも
未来が残っていれば
君たちの勝利だ
未来は確かに存在する
といって
彼は消えた

◆吃水の窓

高木敏克

ともかく海面下にある機関室はじめじめしていた。パイプと配線が交わる廊下には水が溜まっていた。調理室の排水は自然に流れるというのに機関室の水は高圧ポンプを使わなければ排出できなかった。背伸びをする位置には小さな丸窓があったが、それは昔の排水口を窓に作り替えたものであり海面の泡は茶色に見えた。それは吃水の窓といえるものであった。同じような吃水の窓が水夫の寝室にもあったが丸窓が浮いたり沈んだりするので水夫たちは拷問でおぼれる気分になって床は反吐と消毒液の匂いがした。

この船で船室を清潔にする唯一の方法は物を置かないということであり、水夫室にはベッドがなかった。それどころか荷物の置き場もなかった。水夫たちの荷物はすべて大きな袋に詰め込んでロープのフックに引っ掛けて天井の滑車で釣り上げなければならない。滑車のロープの反対にはハンモックがぶら下がっていて、寝るときにはハンモックを引っ張って降ろすと自動的に荷物袋は天井に上がりハンモックを上げると荷物が下りるというのは大昔からの便利な船の仕掛けなのだが船乗りは語らない。

Rはハンモックに乗る前に大きな袋をフックにかけて抱きついた。だめよ、そこは感じるからと袋の中から声がするとかわいい女の顔が袋から出てきた。これで感じるなんてお前もフェチだなあ、おいらもフェチだから海面を見ながらあっぷあっぷしようじゃないかとRは言った。大丈夫？ハンモックは絶対に落ちないの？大丈夫、ハンモックは絶対に落ちない。僕たちは糞尿たれの蝙蝠だから床に下りずに天上であっぷあっぷできる。吃水窓は何度も何度もあっぷあっぷしてハンモックは横に大きく揺れた。不思議な光景であった。二人が何をしたのかわからない。ハンモックから足をつくとRは大きな袋を受け止めて波止場におりていった

◆石段を降りる

にしもと　めぐみ

夏の陽射しが木漏れ日を通して降り注ぐ
この激しさもまた翳りだす　のか
子どもは下らないと言う
生きようとする命が上へ上へと向かわせるのだろうか

降り始めたら
下るばかり……
降りることは意思がないのだろうか

石になってしまった人が
こちらを見ている
私もまた石になる

海が近づいて来た
波たちは無邪気に夏の輝きを無数に照り返している

◆白鳥

にしもと　めぐみ

十年という歳月がいたずらに過ぎた
封印し続けた長い時間

まっすぐな笑顔
あどけない信頼
頼りない命に

守るという名目の束縛
愛という盲目をかぶせた

自由への飛翔よ

生きる

未来は
虹を超え
宇宙の果てまで
続いている

◆一番星

黒田ナオ

会社からの帰りに
見上げた瓦屋根の上を
黒装束の誰かが
ささささささっと走り去る

と思っていたら
ひょいと振り返って

男か女かよくわからない
低い声でこう言った

わたしは昔、お前の母だった

そう言われてよく見ると
頭巾の隙間からしみじみと
こっちの方を眺めている

それは確かに
今朝見たばかり
見覚えのある
目であった

こういう生き方もあったのか

夜の道は
三千里

猿にでもなって
跳ぶ

◆クラブ・アップル

月村香

新しいものが入っております
そうね　クラブ・アップルを
アップルはどういたしますか
ストレートにしてくだされば
あなたの言いたい事はわたし
の言いたい事であるべきだわ
早くクラブ・アップル出して
かたことで伸ばすフランス語
をぶちまけたところで今日は
昼寝をしすぎたわそのティー
カップでいいわ苺やらベリー
のきれいなモチーフだわその
ティーはそのまんまがいいわ
その息でクラブ・アップルを
飲むわ何のストーリーもない
のよわたしは物語を語らない
難しくってダメよかおりと味
と雰囲気が絶望的にわたしで
あってわたしの脳をいじめに
かかるからクーラーをとめて

◆そばだて

大橋愛由等

ひたと迫る夜に跋扈するあぱしいな風よ
（閉ざされた町に揺らめき残存する浅黄と深緋と薄香色。雲が低く垂れこめ風たちは一方的に喋りはじめ、ひとびとの返答を聴こうとはしない。聴こうとしないのは、それはあなた、いやわたしかもしれない。返答なんて存在してほしくないとの思念を公園のブランコの揺らめきが聞き入れてくれたとでも想うのか。無作為にあり続ける路傍の石の耳たちが聴きこんできた風の息吹も記憶されることもなく蕩尽されていく。息せき切って流れる河の怒りに気づかないままに過ごした秋の一日には廃屋のかなしみが似合うだろう。たちあがって捜しものをするとすれば無残な夏の欠片が散らかっている五番てえぶるに向かうがいい。そこにはわたしが書き続けたマドリガルもロマンセもいつのまにか色あせ消失している。ではいったい誰が消し去るいや食べてしまったのか。三日前かあてんの隙間から十六夜が覗きこんでいたのを薄ぼんやりと覚えている。河に見切りをつけこの町から抜け出さなくては夜が追ってくる。無慈悲な夜だ。すべての抒情と旅人を拒絶するだろう。抒情と旅人はさまよう場も与えられずたちすくみ町を覆う寡黙におののくにちがいない。あなたがわたしを冷笑した夜はこんなに不寛容ではなかった。わたしは沈黙を嫌う。石たちはいつだって耳をそばだてている。風はおしゃべり。ブランコは油の切れたきいきいという音をたてる。町とあなたとてえぶるからきいきいとうたが謝絶される時、わたしのなかのわたしがわたしを遮ってわたしであることをないがしろにしようとする。

◆のままの

大橋愛由等

海女が売る赫い嘆き石はからころ嘘をつく
（行き止まりだと知っていて進む。行き止まりだった。「今日はどこで泣くの」高い白い築いたばかりの壁に沿って歩く。ウソはウソのままだった。「お互いに共感しあっていたなんて信じていたのね」昼月を追って川を越えようとしたらわけもなく二羽の鳥に止められた。「自性であろうとしていたつもりなんて」冷蔵庫に貼り付けた古謡は歌いださないまま三年が過ぎていた。「あなたが送った絵葉書はきっと含羞でもだえていたでしょうに」最後に帆立貝を食べたのはいつだったのか公園の樹木に尋ねようとして西風を呼びつけた。「花を手向けるのは日課のカリグラムを描いてからだと言っていたことをほらまた忘れてる」画帳をひろげてゼロのリンゴを描こうとして〈愛〉という言葉を憎んだ。「だからね渡海蝶は海すれすれに飛んでいくのよあなたが知らないあの蜜をもとめて」事態はいきなり惹起するなんてしたり顔でしゃべっていたのは一冊の詩集も読まなかった八月のせいにしておこう。「隠しておいた六角形を見つけてしまったのね、息をふきかけたのね、指でなぞったの」引き出しから取り出した地図には黄薔薇が植わっている家だけが描かれていた。「おやすみを言うひとがいないという理由で六角形を投げつけたりしないわよね」若鶏もも肉のペピトリア・ソースを食べに六角形をカバンにいれて北に向おうとしたけど身体が動かない。「シェリーのオロロソが呑みたい」今日は二人称を使うまいと決めたつもりなのだがどこの辻を曲がったところでその誓いを破ってしまうのだろうか。

◆樹のかたち

高谷和幸

同じものがある
並んで
同じところがあるように
そこにいたる
わたし
と、名指しされた
突き出た部分
多くのかくされたものが
そこにあり
つまずく
重い
愚かさ
誤食の
ともに
同じところで
つまずく
そこに
同じものの
目と口を描かれた
樹
どこからきたのか

◆夜明け

高谷和幸

遺失物
の
ような
撮影機械
断たれた記憶
洞窟にゆらめく
放射光の
瞳＝闇は
空の夜よりも
劣る色に包まれていた
消え失せたものに
新しく
ポイントが
刻まれる
そのまえのわたしは
そのまえから
断たれたあとではなかった
夜明け
窓の前に
実現するまえに

十九歳の残り雪
―《Die Welt ist alles, was der Fall ist.》Ludwig Wittgenstein

冨岡和秀

白い鷺が羽を閉じて語り始める。

憂愁が街角に沈む日に十九歳の愁い人は緻密で確かな思考のソフィアの探究者と記憶の庭ですれ違う。記憶の庭は逆しまに半世紀の時の場を廻り青い空に虹を描きながら、虹を背景に雲の伽藍に変容する。いまや記憶の庭は大伽藍になって積乱雲のように湧き上がっている。雲の伽藍は、しかし、見えざる手と見えざる耳と、思考の揺り籠である見えざる脳髄を持って、青空の大空位に不可視のままに座を占める。かつて地上にあった大空位の探究者たちは脳髄の旅路を遍歴しながら地上の庭で存在の柱を狂熱的に求め続けた果てに雲の伽藍に座したのだ。そしていま自らも探究者である愁い人の狂熱的眼差しを大空位の伽藍は受容するだろう。十九歳の愁い人が雲の伽藍に眼差しを向けるのは、憂愁のなかに狂熱の栖を潜ませているからだ。探究者たちは冥界の門をくぐって久しいが、京都学派に連なる後続者も東都の学窓に息吹いた探究者も地上の庭に、十九歳の記憶を持つ後続の探究者に残雪を散らしている。面々への学恩のよすがとなる des LIVRES 或いは logos たちの書字とその紙背からの声を十九歳に遡った者は聴くだろう。遡られた十九歳は愁いのなかであまたの書字（エクリチュール）の網に愁いの根源を見いだそうとする。そのために敢えて愁い有るソフィア門をくぐる。

雲の伽藍のひとつの場所はアカデメイアの講義室と相似形であるかのような場だ。その見えざる場で遡った十九歳の憂愁の耳には探究者山元一郎の肉声が谺していたという記憶が残雪のように残っている。残雪は遺著とも言える「コトバの哲学」と「ミケランジェロの怖れ」だ。愁い人はこの残り雪を十九歳の憂愁が潜んでいた海から救い上げる。そしてウィトゲンシュタインの認めた《Tractatus Logico-Philosophicus》の日本語訳書を溶けない雪として残した探究者の愁いと心霊を十九歳の憂愁は共にする。（「世界とは、その場に起こることのすべてである」に始まり「語りえぬことについては、沈黙しなければならない」までの七命題を見よ！）還暦後まもなく病に倒れて去ったこの探究者は十九歳の愁い人に微かな肉声と立ち姿を記憶の庭に植えて、これらの残り雪を降らせ続ける。

夕日が雲の谷間の向こうへ沈むとき、憂愁も沈んで夜行するが、伽藍のいま一つの場所で憂愁は、頬が痩せこけ病み上がりのような一人の探究者を眼底記憶にみる。京都学派幾多郎門の船山信一は夥しい紙片に書字群を残した。書字たちは「ヘーゲル哲学体系の生成と構造」や日本語訳ヘーゲル・エンチクロペディ「精神哲学」、フォイエルバッハ「キリスト教の本質」「唯心論と唯物論」の名の書字群であり、これらやその他の書で人間学を構築しようとしたのか。その書字的営みも愁い人の眼底記憶に残雪を降らせるだろう。

遠い山並みに残る牡丹雪の陰にひっそりと隠されている「シェリング哲学の研究」を結晶として残した探究者西川富雄もまた雲の伽藍の一隅に眠る。膨大な書字の遺産を残したシェリングの魂に同一化を果たそうとした探究者の呟きは地道に学的探究にささげた者の呟きである。片隅に煌めく書字的貝殻の煌めきは憂愁の内海の深い場でシェリングへの道をつなぎハイデガーのシェリング講義へと道を続けるだろう。その道を歩むのは愁い人の根底に深い憂愁があるからである。

啓蒙期の北方の博士を引き寄せて究めた磯江景孜が書字の雪を残していたことを知ったのは晩夏に雲の伽藍から早くも冬の雪が北の大地に降ったときだ。愁い人は「ハーマンの理性批判」の結晶的書字を残り雪とした探究者に書字的再会をする。啓蒙期のハーマンについての学的結晶は冬の雪景色のなかでも静かな夜の声を響かせ愁い人の魂に入るだろう。愁いあるがために記憶の庭から雲の伽藍の一隅に、この書字の残り雪を見いだしえた。愁いの賜物であり、残り雪は憂愁に降る賜物の雪である。

それにしても、数えるほどしか遭遇していない探究者に、半世紀ののちに遅すぎる学恩をなぜ感じようとするのか。どうしていまや亡霊となって雲の伽藍に眠る探究者のその学恩を掘り起こしポエジーにしようという思念が湧くのか。憂愁の遍歴者でありし十九歳の愁い人の愁いの源は死の壁から、世界の果てから沸き立ってくるからであると、取り敢えずは応答するしかないが、応答とはまたボードレールの言う照応（コレスポンダンス）と相似形でもあるだろう。そののち遭遇せし仏文学者独文学者神秘学者へのオマージュをいかにして書き認めようかと霧の伽藍の中へ立ち昇り、自らの身体を抜け出して尸解のうちで瞑想するのは十九歳の通過儀礼を果たしたからだ。それゆえ則天去私の如く、十九歳を超越して、憂愁の

杣道に降る雪は必然的にそこに繋留されて、「有ること」そのものである雪の花が咲いている。東都の仏文学者独文学者神秘学者たちも既に冥界に旅立って久しい。雲の伽藍の一隅に座を占めたソフィアの探究者の書字的な声が、愁い人の内海に谺するのは、キリコの描く憂愁の街角にただように十九歳の愁いがなせる技だ。

憂愁に弾かれた愁い人が六甲山中腹の書斎に入り浸ったのは仏文学者小島輝正の家だが、既に冥界に旅立って久しい人は、訳詩集「アラゴン詩集」を残し、アラゴンのシュルレアリスム小説「アニセまたはパノラマ」の訳稿本を遺した。またプルースト愛読の「メロヴィング王朝史話」の訳書を、十九歳の憂愁に残雪として残して雲の伽藍へと去った。自著「アラゴン・シュルレアリスト」をもNational Diet Library に蔵した。逆しまの十九歳の愁い人は憂愁の狂熱の波のなか Edition Tomioka 版訳書「アラゴン、自らを語る」の名で Aragon parle avec Dominique Arban を板行したが板行本は書網の海に消尽する。

その東都の学窓の友・山下肇はゲーテ「ファウスト」や「エッカーマンとの対話」を訳書とし、ユダヤ人カフカの「日記」や「変身」の訳本にとどまらず、我が書網棚にあるショーレム「ユダヤ神秘主義の主潮流」の訳者名としてその名を見いだす。且つは自著「ドイツ・ユダヤ精神史」を遡られた十九歳の愁い人に耽読させる。東都のゲーテ学・カフカ学のこの駘蕩がショーレムのユダイカ続編のカバラ学を訳す意思を示したときには遡られた十九歳が飛び跳ねて極まりかけたがエイジェンシーに阻まれ今は遡られた十九歳の書籍伽藍にこの駘蕩ではない者の訳本が収まるのみ。ゲーテ学カフカ学ユダヤ学のこのプロフェッサーが西の商都を去り際に自らの個展を開いた静かな時、十九歳の愁いに縁としての記憶を我が脳裏に刻んだのが、現実界での遭遇の最後になる。その訳業は多岐に渡り、「希望の原理」、反ファシズム小説「第七の十字架」等その多さに愁い人はますます愁いを深めるばかりだ。

愁い人が Edition Tomioka 版の小雑誌に GNOSIS という名を冠した直後に、獨逸神秘学者の五十代での死の報が GNOSIS への寄稿文の代わりにもたらされ、遡られた十九歳の内海に夥しい涙の川を流した。涙の川の源は岡部雄三という亡き魂である。この東都の学燈の神秘学者からは、存命の頃、自らもエックハルトの論考を認めた編著書「語りえぬものからの問いかけ」を恵まれたが、死の報ののちに神秘学者の遺した二著「ドイツ神秘思想の水脈」「ヤーコブ・ベーメと神智学の展開」を書網の海より救い上げたのは言うまでもない。その救い上げは、愁い人が愁いを極めて、愁いそのものを救い上げることと同義である。商都近くの緑の街から東都に移動してのちも神秘学者は「語りえぬものからの問い」に中世人エックハルトによって応答し、二つの遺著が残り雪として残され、遡った十九歳にもたらされた。この東都の神秘学者も、憂愁の深淵で遊行する十九歳の愁い人も、「語りえぬもの」の存在様態を根底で共有する。

十九歳は憂愁の年齢であり、遡ることが出来るのは幸いである ＊ 其処に見いだされる書字／エクリチュール／écriture の伽藍を個人的思考の海の渦に巻き込んで世界解釈のよすがにする ＊ 世界は無いとも言うが自覚的閉鎖性のうちで開放的「私」があるならば、書かれた「私」世界はある ＊ たとえW氏の言うように私という「主体」が世界の「境界」に有るとしても書かれれば私という世界はある ＊ 記憶を遡った十九歳の記憶の場がある限りは虚器としての「世界」は「有る」＊ 彼女あるいは彼のヒステリーの持つヒステリー性（ヒステリーそのものではない）を新世界発見の「新感覚」の発条と翅にすることで「私の世界」の確かさは予兆の中に「ある！」と言えるだろう ＊ W氏の第七命題に抗して、如何に語りえないものであろうと言語は認識と言語そのものの構造的力によって語ろうとする ＊ 人が先ずあるのではなく今や愁いが先立って有る ＊ ハイデガーの命題「現存在の本質は実存である」に加えて、実存の本質は言語である、と接ぎ木しておこう ＊ 愁い人の根源的愁いのエッセンスは言語の内にある ＊ 憂愁の根源は言語によって表される ＊ 憂愁の本質は言語によって表現できる ＊ 言語の本質は憂愁から湧き立ってくる ＊ 憂愁は存在の淵源にあり存在の秘密を握っている ＊ 脱構築的精神を抱き飛翔の翅を得て雲の伽藍へ飛び上がる白い鷺はひとまず語りおわる。

◆カンブリア紀生物群

野口 裕

ハルキゲニア
親指の詰め腹は赤らみはじめ
近い過去をるる述べる
飛んだミスが消え去るのを待つつもりなのか
恥知らずとか外道とか言われても
何食わぬ顔でにっこり笑い
餌を探す吻はあさってを向いている

オパビニア
人差し指ならおっつけやって来る
あっちはやっぱりだめだった
逆方向なら愁眉は開く
お下劣お気楽にやってゆくなら
決まり文句はあした天気になあれ

アノマロカリス
なんだかあわれな話だね
それこそ野垂れ死にだね
むかしはまさしく英雄だから
雨の関東ローム層
どこでも勝ったしいつでも勝った
負ければ利に敏い人から離れてしまう
墓の前に据えた酒だけが君を知っている

ピカイア
雑費は馬鹿にならないぜ
どこかで精算するべきだ

今ならいける
勝ち負けあとでも構わない

◆おばちゃん

野口 裕

久しぶりやね
移る決心ついた？
ここには誰もいなくなったし
ひとりじゃ不便でしょ
私のいるところとは何かと違って
戸惑うことも多いと思うけど
うちの子もおばちゃんと会うの楽しみにしているよ

小さい時にお父さんが死んだから
お父さんのこと色々と聞きたがるの
おばちゃんから話してあげて
ほら　あいつが死んだときに
胸に置いた花
なんていう名か知りたがっているの
私も知らないの
なんていうの？
うちの方でもいっぱい咲いているよ

ねえ　引っ越ししましょう

ネアンデルタール人の最後の集落は、イベリア半島南端のジブラルタル沿岸の洞窟から見つかっている。年代分析によると二万八千年から二万四千年前と推定されている。絶滅については、現生人類との衝突、稀な自然現象による大規模災害、混血による現生人類への吸収と諸説あるが、確証はない。

◆鐘の鳴る場所で

冨岡和秀

夕方の薄闇がやってくると白い教会で鐘が鳴る。鐘の音が街路を超えて羽ばたいている。そうして夕闇の薄い光とともに鐘の音が夢のなかに入ってくるが、鐘の音が止んだ時、私は夢のなかで私の虚体が死んでいるのを見る。それを知っているのは夢のなかで会った中年男だけだ。夢のなかに白い闇が来て、鳩が翔ぶ。西の空へ鳩が翔び、レクイエムの鐘が鳴りつづく。音が翔び空に飛散し、空に音符♬がしゃぼん玉のように浮かんで流れていく。

中年男の申し立てによると、私の両膝と両足首の関節の可動域が眠っているうちに狭くなり、中年男が歩いている時、私の両足に強く当たって足は音を立てて壊れたと言うのだ。

そういえば、夢のなかで私は足に強い痛みを感じ、歩くことが困難になったという記憶が残夢のように尾を引いていた。鐘が鳴りはじめたのは足の骨が折れた時と思われるが、それ以来、私は下半身付随になり、上半身だけの存在となったという夢の記憶が残る。しかも、私はそれ以来、食事をする必要もなく、頭のなかで思考し想像することだけで存在していた。夢のなかの話だが、いとも簡単に夢の頭脳はいつのまにか飛翔して夢の外部へ散策している。中年男はその散策を見たらしいのだが、彼はその散策を「夢の境域」と名付け、その境域を自らの頭脳のなかから観察していたというのである。夢のなかの時間の経過は速く、私は上半身だけの存在となって「夢の境域」での散策をしてのち夢の外部（その外部も夢の領域だが）では走馬灯のように事態が進行した。散策途中、どこかの母らしき人物が川の水で赤児の体を洗う光景が見られたかと思うと、たちまち川の真上に高速道路が建設され道路はあるところでは川の上、あるところでは川底よりも下の地下に潜り込み、地下道路になっている。地下道路の片隅には資本制経済に敗れた浮浪者が横たわっていたが彼等はかつて町の郊外で大邸宅に住む生活の成功者である。かつての栄光を記憶する顔はいまでは諦めたように苦い表情になっている。地下道路はいつのまにか地下を走る高速道となったり、にわかに地上に出て飛行機の滑走路になった。散策には時折自分の夢から逸脱した中年男も参加して、私の上半身と頭脳を舟に乗せたり、ハイブリッド車に乗せたり飛行機に搭乗させたりした。要するに中年男は「夢の境域」で上半身と頭脳だけの存在となった私の夢の身体と同一化することを望んで、その望みを半ば果たしている。散策風景には建築物も加わり、螺旋形の階段や高速度で階下から最高層まで動くエレベーターを内部に持った超高層の建築物

境伽域数り自う込が
園群織域せ雑柱ろ雑
き所根　じけでうとの場可り築ん

見える。その外壁には昆虫や鳥や爬虫類が装飾されたり、古文書のページが彫りまれている。夢のなかで私はいつしか頭以外の上半身を消していたため、いっそ身軽に「夢の境域」を移動でき、時折建築物の壁面に張り付いて思考と想像力を由に廻らせていた。建築物は外壁に種々の動物や植物の装飾を施したものであ、更に人工的な鉄道のレールや美麗な衣服などが加わって建物を飾り、それが複の建築群となっていた。こうした多様な高層建築群や中低層の建築群が「夢の境」の街路に爆発的に増加していった。今や「夢の境域」は不可思議な風景模様の藍世界になっている。頭だけの私はもはや頭そのものをもたず、軽やかに「夢の域」の風景を俯瞰する羽根であった。

その視野の内部で論理的思考と想像力とファジーな思考を漂わせながら羽根は複化した「夢の境域」を自由に出入りしている。「夢の境域」のあちこちにいろいな洞窟や古めかしいが由緒ある木造建築と弾力性を保持した強化ガラスと合金ので支えられた建物が見出される。直線やリアス式海岸のような曲線のうねりが複に交差して生み出す微細な場所にも、複雑思考と想像力とファジー思考を浸出さ、貝殻を空から降らせ、内なる宝を煌めかせようと羽根が飛翔する。「夢の境」の主はいつしか一般性も怪異性も不可思議性も真理を違えない広い普遍性をもり交ぜた膂力を有するものとなり、見えるものは天にまで至るような驚異の建築となる。それが主の栖であり、もはや頭脳としての羽根である私にはこの人工楽とおぼしき空間に透明の眼差しを差し向けるしかない。

そうして経巡った夢の時間を終えた果てにこれらの建築群を巨大な天網が包み込ですべての建築群ごと上空に持ち上げるのを夢の羽根は見る。天網に纏われた建群は上空に上がるたびに、形状を弾力性あるゴムのようにゆがめたり膨らませたする。天網の建築群は更に上昇しながら透明度を増し、夢の羽根には見ることが能だが、通例の人の眼差しからは見えなくなる。そうして夢の果てかと思われるで天網の建築群は浮いたまま静止する。白い鳩が鐘の音を引き連れて天網建築群なかで翔びながら羽根である私に手招きするのだ。音は総じて調和したゆっくりしたリズムで羽根の私を誘い、夢のなかで羽根は天網建築群のなかに浸み込むよに入って行く。その瞬間、天網建築群は羽根の私を柔らかな光と静かな音の響き包み込む。もはや羽根は光と音の気体物になり「私」という羽根は「私」と名付ることも出来ない唯単に「在るもの」になる。「在るもの」は「在ること」を感ながら透明の論理思考と詩的思考をする自己の未来の不在を眺めている。

白い闇から来た鳩が天網建築群のなかにも翔び入るが「在るもの」に変容した羽の私以外にはその翔び入る瞬間を見ることがない。音の響きは今やこの天網の場を形なきもので満たし、ついに建築群も消尽する。天網のなかでコトバと音の響だけが「在るもの」に属しているかのようだ。

◆呼び声

北岡武司

秋の夜　畳のうえに跪いた
壁の白いレリーフには
両手をあわせ天を見あげるエリアの姿
名を呼ばれ素直に「はい」と応える
私も素直になりたくて祈った
〝われらの父よ(Our Father)……〟
毎朝学校で唱える「主の祈り」を
畳の上で　ひとり声にだした

窓からは
港に点々と船が見える
はるかな航海の道すがら
しばしこの街に立ち寄った黒い船

白い船　日本の船　外国の船
どれも喫水線の下を赤く剥き出して休んでいる

小さな学校でも　講堂に静謐な空気が流れる
いろんな国の人が声あわせ　心あわせ
〝天にます(Who art in Heaven)〟を唱える
この時間が静けさをくれた
なぜか昂る私　その私を鎮めてくれたのは
この時間　この姿勢だ

六十を超した校長のミス・リーが
青みがかった空気の向こうから落ち着いた声で語りかける
「不安は神さまの促しです
神さまの方を向くように促してくれているのです
素直に従い　祈りを唱えることが　もう
あなたたちを変えてくれます
自由の地平へと高めてくれるのです」

今も　黄ばんだレリーフが寝室の壁にかかっている
あれからわたしは少しずつ自由へと高められたのか
ああ遠い秋の夜

◆ことり　とり

中堂けいこ

もうかまわないでちょうだい
あれだけの鳴き声を
この世の外にうっちゃり
八重葎の夏のしずく
ふりむきざま
かまわないで　その六分の
声音を聞き分けられない
十人の姉妹らが
かごのうちそと
手乗りにしたのが　身をひるがえし
羽音のふりふりするのを
この眼でうけとめ
かまいつけるわたしと
あなたであってほしいと
細竹をあむ手つきで
小鳥たちをよせあつめる

◆夢の前の川へ、夢の野へ

大西隆志

吐く息が途切れる
堤までの登坂へと
背高泡立草も走る
光を動かす芒まで
夢の前に置かれる
誰ひとりもいない
早朝の川面に羽音
広がっていくのは
夢の尻尾を踏む私
背後に控えている
水の勢いを飲込む

バスは均一料金で
二百十円也、小銭
ポケット内を物色
消えてしまった刻
電飾に浮かぶ電車
チンチンと夢野に
運ばれてくる子ら
終点の表示の下で
季節の変わり目を
五十年も前の私は
橋の手前で生きた

湯で占い夢で占う
鹿の夢に闖入した
猟師は黙ったまま
山へ出かけて行く
弓矢を背に負って
妻は川に身体浸す
なだらかな川筋に
独木舟が流れ着く
海へ、島へと沈み
夢は挟み込まれる
刻の繁茂を見せた

◆ケーキ

中嶋康雄

女は蚊を口の中で大きくした
雲が幾十にも重なり合い落ちてきそうな午
　後
口を裂けそうなぐらいにあんぐり開け
蚊を指で摘まんで取り出した
縞の蚊の頭をポンポン撫でると
蚊はスルスル飛んで
肥満の男を刺し血をゴクゴクと吸い上げた
男の体はどんどん萎み
「ああケーキが食いたい」
と言いながらゴム風船の滓になった
赤いスカートを着けた女が
蚊の群れを雲のように口から吐いた
おしゃべりな蚊の群れは
テレビ番組に出演して全国のお茶の間に
受像機から湧きだし湧きだし
肥満の女を刺し刺し
血を血をゴクゴクと吸い上げた
女の体はどんどん萎み
「ああケーキが食べたい」
と言いながら滓になりながら
味噌汁をがぶがぶと飲み続け
死んだ曾ばあちゃんの包丁を研ぎ続けた
包丁が膨張し膨張したので
どんどんと隣の家の家族に取り憑き
呪い殺された死体は虫が食べた
コーヒーを入れる小さな犬が
苺のショートケーキを持ってきたので
頭を撫でてやろうと手をのばすと
犬の頭が割れた
割れ目から脳細胞の数と同じくらい
たくさんの蚊が出てきて
女の頭を刺し刺したので
頭が蛸のようになったので
海に沈んで底を歩いたが
赤いスカートが足の吸盤に絡まり
テレビ番組の収録に間に合わなかったので
おしゃべりな蚊の羽を引っこ抜き
ケーキを食べたかったが
食パンで我慢した
「ああケーキが食べたい」
竹の葉が風鈴のように鳴った

◆牛乳

中嶋康雄

牛乳はその白い体を奮い起こし
モーモーと鳴き立てた
午後の日差しは激烈で
「地球の滅亡よりも長生きする」
と神様にいわれたはずの
針っぽい雑草が萎れていた
牛乳が長靴を履いてその自分の先っぽを
ひねもす囓っていると牛の母さんが
「母さんの耳を囓ってもいいからもう
自分を囓るのはやめておくれ・・・」
と泪を流して訴えた
泪の色は白かった
白い白い白い白木蓮の花が牛乳の実をつけ
無殺菌なのですぐに腐ってしまった
教科書はいつもつまらなかった
給食の牛乳は不味かった
牛乳はその白い邪鬼を奮い起こし
手をあげた
先生は無視した
牛乳はネバネバとしつこく手をあげたので
給食の時間になると
先生はその手をひっつかんで
ゴクゴク飲んでしまった昼下がり
先生の腹はねじ切れるように
痛み痛み痛みその腹は紫色に晴れ上がり
地球の滅亡よりも先にねじ切れた
「コーヒーよりも紅茶だね」
牛乳は鳩に乗って
校庭の雑草が退屈の欠伸をした
そよそよと牛乳が吹いた夕暮れ

◆あにみたす

声のためのver.20160820

安西佐有理

ここにいたのは、だあれ
いちにちじゅう、西日がさしこみそうな二階
おおよそは空のブリキの函と
半透明のプラスティックの衣裳ケースがおかれた
したしい、しらない部屋
洋服だんすのハンガーで
肩先のまるい、いつだかの背広
ゆったりとわすれかけたワンピースが
たたずんでいるすきまに
平屋の一階にある階段の下
よくかたづいたうすあかりの食卓が見えました

この家でも、サイダーのあきびんが
黄色いケースにならんで、近所の酒屋から
とどけられています
えんぴつと万年筆で書いた残暑見舞いのはがきは
その手前の煙草屋のかどのポストへ
出しにいくところだし
白い食器棚の把手に、赤と白の水玉もめんで
つくった
きっとあなたによく似てきまじめなくだもの
が二つ
ぶらさげられているのですよ

いまか、いつか、帰ってくるひとらに
押入れの、ずっときばんだふすま
冷蔵庫の白かったドア
風呂場へ通じるはずだった日曜大工の扉をあ
けるたび
こんにちはを
あかるい呪文のように
おそるおそる
なんどもつぶやいて
つかのま、いそうろうする（なんどめかの）
暑い旅のとちゅうの、路地のすずしい時間
庭の松の木や、ゆずやきんかん、つばきの木
がおそらくは
たのしかったわたしたちを見知ってくれてい
るので
「ここを（たぶん）おぼえている」と
やがて思えるでしょう

そうはいっても、てずからたてた
Animitas（あにみたす）―魂たち、とよばれる
あしたの祠にいるのです
路傍の無名の祈念碑とかわらない
うっすらとこころぼそい平穏のなかで
わたしたちのもういない歓声やささやきは
おりたたまれて
きちんとひきだしにしまわれたから
ひらかれた記憶の川にながされ
ときおりはこの家の窓ガラスをたたき
風鈴もゆらします

ここにいるのは、だあれ
ここにいたのは、だあれ
旅のとちゅうの、つかのまの、いそうろうの
時間

◆Para ver que todo se ha ido, / par aver los huecos y los vestidos, /! dame tu guante de luna, / tu otro guante de hierba,/ amor mio!
[If you wa to to see that nothing is left, / see the emptied spaces and the clothes, / give me your lunar glove, / your other glove of grass, my love!]
すべてが過ぎたことを知るために／空虚と衣裳を眺めるために／ぼくに渡してくれ　きみの月の手袋を …
(Federico Garcia Lorca, “Nocturno del hueco” [“Nocturne of Emptied Space” Tr. Greg Simon & Steven F. White]
フェデリコ・ガルシア・ロルカ「空虚のノクターン」鼓直訳)

◆多雲にて

大橋愛由等

さばききれない朝を歩き
歩き果てては
三叉路に立ち
うつむき
くぐもり
うろたえ
多雲を指差したのは
ボクの思い違い。
キリコの青を信じて
歩きつづけ
夜の石群れに
名付けを
刻みながら
マドリガル（恋歌）を唄い
予兆を忘れた小鳥たちの機嫌をとり
風のマダラを
克明に
水面に記載
しようとしていたのも
ボクの思い違い。
あなたのソレア（悲しみ）は
月の戯言
あなたのコンパスは
破れた傘の果たせぬ約束
昨日と今日のクラウンは
微笑っているばかりの
お調子者で
ミルフィーユを
少しほおばれば
歩き歩いて歩きつくした
真実は
想いのまま
気づかぬ愚かしさに
愚直の王冠をかぶった
風たちはヴィノティントを
かっくらってせせら笑うばかり

A:もしボクが雲になったら、
B:ボクは目になってキミを見る。もしボクがリンゴになったら
A:ボクは口づけになる。もしボクが胸になったら、
B:ボクは真っ白なシーツになる。もしボクが魚のマンボウになったら。
A:ボクはナイフになる。
B:でも、どうして？ どうしてボクを苦しめるの？ ボクを愛しているなら、ボクが連れて行くところまで、どうして一緒に来ないの？
A:キミが寝床の周りをうろつくなら、ボクはキミのあとをついていく。
でも、ぬかりなくボクを連れていこうとするところにはついていかない。
B:もしボクがまあるいマンボウになったら、キミは海の波になる。海藻でもいい。ボクに口づけしたくないなら、何かずっと遠いもの、たとえば、満月になればいいんだ。でもナイフはないじゃないか！ ボクの踊りを邪魔してご満悦なんだ。ボクが踊るのはキミを愛する唯一の方法なのに。
A:もしキミが丸いマンボウになったら、ボクはナイフになってキミを切り裂く。なぜなら、ボクは男だから。アダムより立派な男だから。キミはボクよりもっと男になって欲しい。キミが歩くと、木の梢がじっと佇むほどのたくましい男になって欲しい。でもキミは男じゃない。
B:キミは月にまで逃げて行くかもしれない。女の血が滴ったレースのショールにくるまった満月のところまで。
A:もしボクがアリになったら、キミは地面になる。
B:もしボクが地面になったら、キミは木になる。
A:もしボクが水になったら、
B:ボクは満月のマンボウとなる。もしボクがマンボウになったら、
A:ボクはナイフになる。春が四度巡ってくるあいだ、ボクは鋭いナイフになる。
B:ボクを風呂場に連れてゆき、溺れさせたらいい。それがボクの裸が見られる唯一の方法だ。もしボクが「ボクがマンボウになったら？」と言ったら、キミは「ボクはタラコになる」っ言うんだ。
A:斧でボクの脚を切ればいいじゃないか。ほっておけば、廃墟の虫が寄ってくる。でなきゃ唾をかけてやる。
B:そうして欲しいの？ じゃあ、さよなら。ぼくはどってことないからね、廃墟を降りていったら、愛が見つかる。降りていけばいくほど、愛が見つかるんだ。
A:どこに行くのよ？ どこに？

さばききれない朝があり
さらされたナイフは
さりとても鈍く光り
さびしく待ちつづける
さえざえとした満月の
裂かれる前の
さみしさと
さむさに浸された心は
坂道をあるくボクの
さしせまるナランハの陰に
さわさわとののしる声のもと
さらなる廃墟の虫が
さてはさてはと
沙汰を待っている風でも
避けているようでも
催促しているようでもなく
最小の日陰に蝟集する
ささやくばかりの詩人たちは
差異のわずかなまなかいを交わし
差し支えのない詩語のまぐわいは
さみどり色のマンボウを呼び
さしかえたい木の梢には
さきほどから何度もくりかえされる
さかしらな箴言が疎ましくぶらさがり
さかのぼる叙情のありかは
砂糖壺にひた隠れる
さなぎたちの未生の夢に転嫁して
さんざん重ねた思い違いは
散策した多雲の見届けも見失い
簒奪された昨日と今日の佇みは
さらさらとさらさらと失語してゆく

（AとBの掛け合いの箇所はフェデリコ・ガルシア・ロルカ作・戯曲「観客」より引用。田尻陽一訳・脚色）

神戸詞あしび

125-2018.10.28 大橋愛由等

台湾―近隣する異郷
日本との交雑が現実

驚きの三日間だった。

海外旅行をしたのは四半世紀ぶりだろうか。あらたにパスポートを取得して、台湾に向かった。

前回の海外旅行は一九九三年のスペイン旅であった。そして迎えた一九九五年の阪神・淡路大震災。私の中に身心ともに震災以前と以後に大きな断層が生じた。ぽっかりあいた穴を埋める必要があった。鎮魂と生の連続性を確保するために毎年一月に奄美紀行を重ねて今年で24回となる。

震災から日本に閉じこもっていたわけではないが、旅といえばひたすら吸い付けられるように奄美を目指したのだった。そんなわたしが奄美よりさらに南の台湾を目指したのは、亡父・大橋彦左衛門がかかわった東アジアの故地を訪れてみようと思いついたからである。

台湾へは、娘・紗奈と二人で旅をした。彼女は大学院生であり、その研究カリキュラムの一環としてベトナムのダナン工科大学に研究のために二度滞在している。またラオス、タイ、カンボジアといったアジア諸国や、アメリカのシリコンバレーなども旅していて海外旅行は手慣れている。

かたや私は大学生時代、バックパッカーとして、ヨーロッパ、アジアを闊歩したのだが、今回の台湾紀行で旅慣れた娘に同行して、旅の様相がまるで変わっていることに当惑するばかりであった。

台湾・台北市にある誠品書店。アジアで一番大きな書店とのこと。日本文学コーナーも充実

関西国際空港から台北までは四時間。途中奄美群島の上空を通る時は食い入るようにしてその島々を探していた。

台北という都市。それは日本と日本文化がごく自然に交雑していた。街にはいたるところに日本語が溢れていた。台湾どころかアジアで一番大きな店舗面積だという誠品書店に行くと、日本文学コーナーが設えられていて、最新の日本文学が翻訳されて並んでいるのには驚いてしまった。また「一人出版社」というコーナーもあり、台湾の書店ならびに台湾の書籍文化の懐の厚さに感動した。ただこれだけ豊かな書籍文化を誇りながら、文庫・新書がないのには不思議を感じていた。

交雑する日本といえば、台北のコンビニエンスストアは日本仕様で、商品構成や、店舗レイアウトも同じであるのもびっくりであった。日本のコンビニでなれた位置感覚を活かすことができる。さらに嬉しいのは、漢字がほぼ一緒なので発音はわからなくても漢字を読めばその商品内容を把握できるということである。台湾と香港で使われている漢字は繁体字と言われている。一方の中国本土の漢字は簡体字である。では日本の漢字はどうなのか。台湾に身をおいてみると、日本の漢字も「簡体字」のひとつなのだと気づく。同じ漢字文化圏でも台湾から眺めると、日本を相対化できる。ひとつ面白いエピソードを綴ろう。わたしの顔は日本人離れしている。といっても西洋風な顔立ちではなく、どちらかという大陸的といったほうがいだろう。若い頃も海外で黙っていれば日本人とおもわれず、華僑の仲間とみられたことが多かった。そんな父親から生まれた娘である。やはりアジアに出ると日本人に見られない。台湾に向かう飛行機の中では私が読みもできない台湾の日刊紙を拡げていたこともあるだろうが、客室乗務員がわれわれの周囲には日本語で語りかけるのに、われわれには中国語で話しかけてくる。また台北のホテルについてエレベーターに乗っているとわれわれ父娘の眼の前で日本人がこういった。「このひとたち日本人じゃないよね、どうやって声かけたらいいんだろ」。

詩と評論
月刊「Mélange」Vol.136
神戸

2018年10月28日　通巻136号
発行所／月刊「Mélange」編集部
〒650-0012 神戸市中央区北長狭通 1-7-1 2F
編集・発行人／大橋愛由等（「Mélange」同人）
maroad66454@gmail.com
定価600円(税別)